水上勉全集

5

水上勉全集　第五巻
定価二四〇〇円
昭和五十一年八月二十日初版
昭和五十六年十二月十日再版
著者　水上勉
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
〒104東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七六

目次

しがらき物語　3
波影　169
西陣の蝶　329
鴉の穴　381
釈迦浜心中　427
あとがき　465

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

しがらき物語

一

しがらき（信楽）は、琵琶湖の南の山中にある古い焼き物の町である。京都や大津から、信楽へくる場合は、草津線水口駅から、信楽線に乗りかえて、終点の長野で降りるのが唯一の早道だが、本線草津駅の手前にある笠山から、大戸川に沿うて、黄瀬へ出る道と、もう一つ瀬田川の南へそそぐ信楽川をさかのぼって朝宮へ出る道がある。どちらをえらんでも信楽までは、七、八里はある。山を分け入る道だから、急坂もある。いく曲りにもまがった渓谷の道をゆかねばならない。

灰色の霞にもやる尾根の重なりを左右にみながら、谷ふかくへ入りこんでゆくと、やがて、山が割れて、信楽盆地がぽっかり浮きあがってくる。青嶺の山と山のあいだにそれをみるだけに、何ともいえぬ気持になる。盆地は田畑も少々あり、川に沿うて細長く長野の町屋根が延びている。その山裾に煙突のつき出たのぼり窯が傾斜屋根をみせて並んでいる。南近江に、こんなのどかな町がかくれていたのかとびっくりするほどである。四囲を山に囲まれた美しい町であった。

山といえば、信楽盆地は、北に甲賀、南に伊賀、両山地をひかえていて、もうひと足深く入れ

ば、三重、奈良の県境なのであった。われわれは、滋賀といえば、すぐ琵琶湖を思いだす。湖をとりまいているはずの滋賀の国に、こんな山ふかい一角があることにあまり気づいていない。いわゆる信楽焼といわれる陶器も、火鉢とか、土瓶とか、手あぶりとか、瀬戸枕など、われわれが日常よく目にとめていて、知られすぎているために、かえって、信楽の在所をせんさくする人が少ないのかとも思われる。

信楽は、日本の古い焼き物の中で、長い歴史を誇っているそうである。古信楽の茶器や壺は、好事家ならばすいえんの物らしく、壺にしても、茶器にしても、信楽は独自の味をもっているといわれる。とくに花壺や茶壺にみられる無釉の灰かぶりの味などは、素朴で、何ともいえぬ雄渾なものだという。壺や茶器を眺めているだけで、好事家たちは南近江の盆地にあそぶ気持がしたのだろうか。

そのような茶器、壺などに、まったく関心のうすい作者にとっては、信楽はあくまで、火鉢や土瓶をつくる町であって、むしろ、京の清水寺に至る坂道の途中で、陶器商が軒下にならべている狸の姿をみて、「あれがしがらき焼だよ」と教えられた日のことを思いだすと、信楽の名は鮮明となるのである。何となく、信楽はその程度にしか印象はなかった。

ところが、今から、一年ほど前に、とある知人から、この物語の主人公となるはずの弥八という陶工が、信楽の村に住み、数奇な六十年の人生を生きて、とうとうこの信楽で死んだときかされた時、焼き物よりも、弥八の人間に興味をおぼえた作者は、ふと、信楽を訪ねてみたくなった。それが最初で、前後、五、六どの往還を重ねるに至った。信楽の美しさに魅了されたのも、焼き

物のためではなくて、信楽の風景と人物にあった。

私が五、六ど訪ねた中で、もっとも美しいと思ったのは、瀬田川の南にある大石村から沢野の追分道を南へたどり、石倉、気倉、桶井、宮尻と、せまい渓を登りつめた道である。はるか木津川べりの大極殿跡から和束町を経てくる道と出合う朝宮までの信楽川だ。石がうつくしく、やや、赤みをおびた花崗岩質の岩の上を這うようにして水が流れていた。手の届くような道端にある水は冷たく澄んでいた。しかも、川の両側は黒みどりの茶畑である。信楽茶の産地であった。広い宇治の茶畑の茶よりも、この辺りの山陰の段々畑に沈んでみえる茶畑のそれが、はるかに美味だとは思ってもみなかった。しかし事実はそうだときいた時、びっくりしたものである。信楽川の水が澄んでいるためだろうか。それとも、渓間の傾斜に丹精に植えた茶が、陽あたりわるいため、かえって、茶の味をデリケートにするのか、門外漢の私などにはわからない。ただ茶畑は何ともいえぬ美しさで、遠眼には絨毯の階段のようにみえた。冬春の寒い季節、さらに五月から夏にかけてのみどりの季節、秋から冬にかけての紅葉なども、四季とりどりの山肌は、見あきない景色をうつし出してくれた。かわらないものといえば黒みどりの坊主刈りの茶畑と、信楽川の水だったかも知れない。形のいいおだやかな山が全山赤土山かと思われるほど密生した女松を箸でもつきさしたように青みどりの中に浮きあがらせていたし、しぶきをあげる谷にさしわたした土橋なども、朽ちかけた干木の丸い木目が土をかぶり、その上に、草が蓬々と生えている有様などは、まるで一幅の南画へ吸いこまれてゆくようだった。昭和三十八年に六十歳で死んだ信楽の陶工弥八が、京の清水へはこぶ陶土をカマスに入れて、リヤカーにつみ、毎日通ったのもこの道だった。

弥八が土掘りしていた当時は、昭和二年であるから、二十四歳で、まだイガ栗頭の子供子供した風貌をしていた。背丈は馬鹿でかく、五尺八寸もあったという。

この大男……弥八のことを書くのが、私にあたえられた物語の本筋なのである。

二

弥八は、幼くして父母に別れ、いったい自分がどこで生れたか知らなかった。小さいころの記憶の中で母のことをおぼえているのはたった一つだけ。それは、どこであったか、わからないが、今から思うと、ちょうど、京へ陶土をはこぶ途中の宮尻のあたりから、朝宮へ出る渓谷に似ているようだった。左右にみどりの山の壁が屏風のように迫っていて、右側に、流れのきれいな川があったと弥八は思った。春先だったかも知れない。弥八は母といっしょに歩いていた。川は道のすぐ下を流れていて、川柳や熊笹のはえた岸からのぞくと、川原に灰まだらの小石が、うず高くつもっていた。その川原の石に、一羽の青足シギがとまっているのをみたのは母よりも弥八の方が早かった。弥八は幼いころからシギを知っていた。赤足と青足のがあって、いずれも、背が高い。嘴がとがっていてすんなりとしていた。いま、眼にとまったシギは、こっちをみつめてうごかなかった。弥八は、足もとにあった小石を拾って投げつけようとした。

「やめろやァ弥ァ」

母親がうしろから弥八の手をおさえた。

「シギが子を産んどるわ……川原のシギは、小石の中に巣をつくる……見てみィ、弥ァよ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

と母がいった。弥八は、石を投げようとした元気をへし折られて、母をふりかえったが、すぐ背のびして、川柳の小枝の間からシギをみつめた。青足シギは、ふくよかな胸毛をふくらませ、灰いろの胸から、背中へかけて、点々と斑点のついた茶褐色の羽根をしずかにたたんでいた。弥八はシギの、透けてみえるような青い足をみた。と、その足もとに、枯草が輪になって置かれてある。シギがはこんだものらしかった。母のいったように、巣である。よくみると、その枯草の輪の中に黄色い頭をもたげた二羽の子供シギが、ヒクヒクうごいていた。

「お母ちゃんシギじゃぞ……弥ァや、子ォが腹へったちゅうで……お母ちゃんシギが餌をさがそかと、思案しとる。……弥ァよ……かわいそうじゃから、こっちへ来んか」

母親は弥八の手を力づよくひっぱった。その力はイヤにつよいので、弥八の手首は痛くなった。

「お母ん、なんで、シギはとばんのじゃ……」

と弥八はきいた。

「子ォが誰ぞに取られるじゃろ……誰もみとらんと……とぶわいな」

弥八は母に手をひかれて、川原から遠ざからざるを得なかった。いつまでも、母親シギが青い足を川原につきさして直立させ、子を守って動かなかった有様が、頭に焼きついた。

母が、いったい、その日、どこへ出かけて、自分とそのような山道を歩いていたのか、弥八にはわからなかった。白い手拭をかぶって、うすよごれた野良着をきていた母の容貌は不思議と不分明ではっきりしない。その母親も、八日市という北の町で死んだときいたのは、すでに弥八が、信楽の町へきて、土掘りをはじめた十三の時だった。弥八にわかっていることはシギでさえ子を

見放さなかったと教えた母が、自分を捨てたという事実と、その母親が八日市で死んだのなら、自分の生れた在所はきっと、八日市か、水口か、和束のどこかの村に相違ないと考えられることであった。弥八は母といつ別れたのかおぼえていない。八日市も、水口も、信楽の北にある小さな町だが、信楽のような山中にあるのではなくて、田畑もひらけた、鉄道沿線の、駅のある町であった。

弥八は八日市にも水口にもまだ行ったことがなかった。弥八は苗字を臼井といったが、土掘りをしている弥八には、あまり、この臼井という姓は必要はなかった。村人や荒くれた土掘り仲間から、弥ァまたは、弥八と呼び捨てにされていたからである。

弥八が二十四歳の年は、雲井村に住んでいた。雲井というのは、信楽の中心地をなす長野から、北へ約二里ばかり離れたところで、焼き物の村であった。大昔の窯跡のある古い由緒のある村だが、弥八はここの小森助太郎という陶土商人の小舎に寝起きしていた。小森助太郎は信楽だけでなく、遠く、大津、京都などへも、陶土を売りさばく商人で、信楽谷とよばれる、黄瀬から長野の裏側までのびる陶土層の多い山持ち仲間であった。土売りだから、自分では陶器は焼かない。焼き専門の業者、すなわち陶工たちの窯へ土を届けるのが商売だったわけである。家に、弥八のような六尺ちかい屈強な男が八人いた。土掘り、土運び、荷届け。各々がかわるがわる分担をきめて働いた。弥八は土掘りが上手だった。時には、手が足りないと京や大津の窯元へ土をはこんだ。弥八が、陶工木崎平右衛門に会ったのは、清水の陶工、倉橋金次郎の窯へ陶土をとどけた日である。

京や大津の陶工たちが、わざわざ信楽の土を買ったのは、信楽の陶土質がどこよりも秀れていたからである。じっさい、茶器や壺などを焼く陶工たちには、昔から信楽の土は貴重だった。いま、手もとにある文献をよんでみると、「京つくりの信楽」などという言葉が出てくる。江戸時代に、空中信楽、仁清信楽、宗旦信楽などといい、本阿弥光甫や、野々村仁清や、千宗旦の名も出てくる。これらの茶人が、信楽を愛してふかい関係をもった証拠であろうか。京にはむかし、茶器問屋の新兵衛という者がおり、「新兵衛信楽」と名のったと記録にもある。わざわざ信楽の陶土をとりよせて、京都で焼いたのであろう。清水坂の倉橋金次郎も、信楽の土を愛した一人で、京都陶芸界ではかなり名の通った人であった。清水坂の途中から高台寺道へ入ったところの東側屋敷に傾斜地を利用して小さな窯をもっていた。主として小モノといわれる茶器、皿、壺の類を焼き、坂の表に面した販売所で売っていた。弥八がこの倉橋の窯へ約五十貫の陶土をおさめたのは、秋末の一日で、受領証に判をついてもらっていよいよ帰り仕度にかかろうとした時だった。金次郎の家の客で、六十すぎた白髪の、精悍な顔をした老人が、弥八の姿に眼をとめていた。それは射すくめるような三白眼だった。いや、この三白眼はふつうの眼光ではなくて、ギラギラした一種異妖な眼といえた。誇張していうと、気ちがいじみていた。

「あれは、誰や」

と老人は、上りがまちに腰をかけてから、今しがた裏口でカマスの空を積み終えリヤカーの荷台に綱をたぐりよせている弥八をあごでしゃくりながら問うた。

「あんたと同じ里からきやはった弥八さんや。このところ土をはこんでくれてはります……なか

なか、鼻のええ男でしてな……山で土を掘らしたら一流どすな」
と倉橋金次郎は、五十をすぎているのに、まだ、黒髪のふさふさした頭を振って微笑してから、
「犬のような男どす」
といった。老人は瞬間眉をつりあげて、鋭い眼で弥八をみていたが、やがて、その目尻を急に下げてやわらいだ顔にもどすと、
「近ごろの小モノの職人は尻がかるいのう」
といった。
「せっかく、清水から見つけてきて、信楽へつれて帰ってもの……すぐに、景気のええ火鉢づくりか、湯たんぽつくりに走ってしまいよる……若い者は、どうしてこう、金がほしいんじゃろの。辛苦して、汽車の茶瓶をなんぼ焼いたとて、窯が啼くじゃろに……」
白髪頭をせわしなく振った老人は、そういい終ると、くしゃみを一つした。
「京の若者はのう」
と倉橋金次郎がいった。
「性根が出来ておらんのやろ……清水坂におっては、寺詣りの別嬪さんが眼につく。坂を下りたら宮川町の廓どすがな。……性根をすえて、地道に壺つくりに精を出すよな子はまず少のうなった。ちいと銭が入ると派手に女あそびや……弟子は……あんな……（と倉橋金次郎は、裏口でリヤカーの綱をしまい終えて、把手をとって、今しも裏庭から坂へ出る小門へ歩いて行く弥八の後ろ姿を顎でしゃくった）土掘りの中におるかもしれん。あんな男の方が……なんぼ正直者で勉強

家か知れん……掘り出し者というさかいの……平右衛門さん」

平右衛門といわれた老人は苦笑した。が、いつまでも、裏庭をみていた。すでに大男の弥八が出たあとである。ひっそりした庭の隅に、金次郎が丹精した葉鶏頭の紅い葉が、陽を吸うているばかりである。

「なるほどの……」

平右衛門は立ち上っていた。陶工木崎平右衛門——この老人は、信楽の神山に住む人で名工といわれた。信楽焼の中でも、中心となる長野は、火鉢、紅鉢、スリ鉢、壺、勅旨は神仏用陶器、土瓶、食器、黄瀬は燈明土器、高台油差、徳利、神山は土鍋、土瓶、急須、茶碗などといったように、それぞれ、大モノ、小モノに分けられて、村落で、特色を生かしながら、生産されていた。現今のように、どの家も個性のない火鉢や植木鉢を製造する時代ではなかった。神山の木崎平右衛門といえば、茶碗造りに秀でた名工だった。同じ仲間である清水坂の金次郎と平右衛門は懇親にしていた。京へきたついでに、必ず立ち寄る習慣だったのである。平右衛門がこの日わざわざ清水坂へよったのは、いまも、二人の口にのぼったように、神山の平右衛門の家に弟子がいなかったからである。これまで、小モノ専門に研鑽しようとする若者を、京からひきぬいて、平右衛門はいろいろとつかってみたけれど、どういうわけか、長つづきせずすぐに出ていってしまった。平右衛門はすでに六十をすぎていた。妻のない彼は孤独だった。家にはその年、九歳になる小夜という貰い子とヒデシがいるだけである。この小夜に、やがては婿をもらってやらねばならない。小夜は平右衛門が長野の村からもらってきた、父母に早死された薄幸な子であったが、三つの時

から、ヒデシのお紺に面倒みさせ、三人暮しで、ひそやかに神山で茶器を焼いてきた。つい、この年の夏の末まで勇吉という若者がいたが、仲間の甘い話にのって、長野村の火鉢づくりへ奉公がえしてしまうと、平右衛門は徒弟のない淋しい生活にもどった。ヒデシのお紺を相手に、孤独にロクロの前にすわっていた。京へきたついでに、またぞろ、徒弟を望む若者がいないかと、金次郎に訊いてみたかったのだ。ところが、金次郎はこんなことをいった。

「若者のいつかないのは、平右衛門さん、あんたが、芸術家すぎるからかもしれまへんな……近ごろの子は昔とちごうて……主人の顔いろをみて、息をつめんならんよな先は敬遠しますな……それに、いま、いうたように、京の若者は性根があきまへん。田舎へ入って、何が何でも辛抱しようという男はおりまへん。……根っから焼き物好きとか、土いじりが好きな男でないと、昔からつとまらん商売どすさかいな」

まったくそのとおりだといわぬげに平右衛門は、苦笑していた。ところが平右衛門の眼は気ちがいじみて光り、裏庭の葉鶏頭の紅い葉をにらみすえるようにみていた。

「なんですかい。平右衛門さん、あんた、葉鶏頭の赤でもまた、出してみようと……」

金次郎は、そんな愛想をいった。平右衛門は首をふってだまって瞳(ひとみ)をあげて、

「雲井いいましたかいな」

と金次郎にきいた。

「はい左様です。神山から二里半しかはなれてしまへんやろ……きっと雲井どす、そこの小森ちゅう土問屋の土掘りどすがな」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo